

「旅をする木」 星野道夫著

自然や動物の作品で知られる写真家 星野道夫氏の随筆。写真の挿入はっさい無く、随筆のみの著書である。日々の生活で自分の心や体が慌ただしく揺れ動いている時にも、広い宇宙や地球のどこかで、「もうひとつの時間」がゆったりと流れている。それを知る事はとても大切なことだと語っています。

晴れ渡る夜空に舞うオーロラ、鮭を両腕で抱えた時にバネのようにしなる力強さ、トーテムポールの神話、カリブーの大群の壮大な旅、ブラックベアの野生の匂い、人との出会いと忘れがたき人との別れ、頭上を飛ぶカナダツルのV字編隊、ツンドラの新緑の絨毯。

少年時代のアメリカ冒険旅行からアラスカへ移住後15年間の出来事など、大いなる自然とその力強さ、脆さがまるで抒情詩のように綴られています。そして彼は、圧倒的な強さより、むしろ弱さあるいは、厳しさ、内に秘められたエネルギーに惹かれているようです。

心の内を表す言葉が清らかで美しく豊か、それでいてストレートなので、ビンビン来ました。

1996年、人気番組の取材中にヒグマの襲撃に遭いこの世を去る。享年43歳。彼自身が悠久の時の人となってしまいました。

時は流れている。生き物の一生は短くそれも突然断ち切られる。だからこそ今、この時にエネルギーを注ぐ。限りある人生の旅人へ贈る一冊。

文藝春秋 1994年刊 1476円（文春文庫にも収録、480円）

（霜葉）

